

項羽本紀を読む

杉山寛行

一

項羽本紀の歴史的時間は、「秦二世元年」の紀年の下に始まる。先ずこの七月に陳勝呉廣の乱が起こったことが記され、続いてその九月、項梁と項羽とによる会稽での叛乱が記されることによって、時間は動き始めている。

事情は高祖本紀でも同様であって、高祖本紀は秦二世元年秋季の陳勝の乱から物語を始める。換言すれば、項羽も高祖もともに陳勝の乱によって歴史的人物となった、と言える。

バートン・ワトソンは、孔子と陳勝とが世家に採りあげられたことについて、次のように述べている。

「漢王室は孔子の文化的継承者であったと同時に、陳渉の軍事的事業の継承者でもあった。司馬遷がこの二人の伝記を漢の世家の劈頭においたのは、おそらく心中このことを考慮したためだろう」。

漢の世家の劈頭に陳勝の世家が位置するように、高祖本紀や項羽本紀の冒頭にも陳勝の軍事的事業が記録されているのである。

ところで紀年について注目するなら、「秦二世元年」と記された後、漢元年に至るまで紀年はなく、漢の元年に至ると「漢之元年」と記し、その後は「漢之二年」「漢之三年」「漢之四年」と記した上で、「漢五年」の項羽の死を迎えている。秦始皇本紀は、「二世皇帝元年」と記した後、「二年」「三年」と記載する。高祖本紀では、「秦二世元年」「秦二世二年」「秦二世三年」とし、漢に至ると「漢元年」と記し、その後は「漢之」の二字がなく「二年」と紀年して、各年ごと同様に記載していく。

この点について、明の陳仁錫は、「漢之元年、漢之二年、漢之三年、漢之四年、此れ子長、漢の年を以て楚の事を紀するは、例なり。故に之の字を加え以て之れを別かつ。五年楚亡ぶるに至りて、然る後直ちに漢五年と書す、一統を示すなり」としている。

西楚の霸王であった項羽は皇帝ではなく、それ故記すべき独自の紀年を持たない。しかし現実には、陳勝の叛乱以降、彼の死に至る期間は最も君王に近い存在であった。漢楚並び立つとはいえ、少なくとも陳勝の叛乱からの三年間は、項羽が歴史の中心にあったので

あり、項羽本紀が書かれた理由もそこにあつたはずである。そうであれば、この八年の期間を他の本紀と異なつた標識を用いて記す工夫のあつたことも首肯できる。

先ほど引用したバートン・ワトソンは、次のように述べている。

「何ゆえ司馬遷が項羽の話を他の場所ではなく本紀に置くことにしたか。その説明になるかと思われる別の理由が存在する。秦の滅びるまえ紀元前二〇九年、項羽の伯父項梁によって立てられた傀儡君主義帝の治世を認める態度をとつたとしても、なおかつ義帝が項羽の部下に殺された紀元前二〇六年と、高祖が尊号を称した紀元前二〇二年のあいだに、空白の期間が存在したという事実である。漢はその治世の初めを五年前にずらし、紀元前二〇六年に始まつたこととし、この空白を埋めた。しかしほんとうの事実からすると、司馬遷が認めたように、紀元前二〇六年の終りから二〇二年の初めまで、名目的な君主の支配しえない三年の期間が存在したのである。そこで司馬遷は賢明に、この期間を通じて実際の君主に最も近い存在であつた男、項羽の名の下に、本紀でその全期間を扱う態度をとつたのである」^(注3)

こうした事情の紀年への反映が、秦始皇本紀や高祖本紀とは異なつた表記となつて示されたのであろう。

項羽本紀が紀年によって二つの部分に分かたれていることは、物語の構造とも密接に関係している。司馬遷がその論賛で「三年にし

て遂に五諸侯を將いて秦を滅ぼし、天下を分かち裂きて王侯を封じ、政、羽より出て、號して霸王と爲す。……自ら功伐を矜り、其の私智を奮いて古を師とせず、霸王の業なりと謂い、力征を以て天下を經營せんと欲せしも、五年にして卒に國を亡ぼし、身は東城に死す」と言うように、物語自体は前半の三年間と後半の五年間とに分節されている。また前半の最後には、論功行賞による侯王の分封のリストが置かれている。物語を時間の流れから眺めるなら、このリストが布置されたことによつて、それまでほぼ時間の流れに沿つて展開してきた物語は、ここで大きく留まり、漢の元年の紀年から再び時間が流れ始めることになる。時間的停滞が設けられることによつて、読み手にとっては前半部分と後半部分とが判然と分かたれているという印象が与えられている。また記述の内容から見ると、陳餘が「項羽、天下の宰と爲りて平ならず。今、盡く故王を醜地に王たらしめ、而も其の群臣・諸將を善地に王たらしめて、其の故主を逐う」と言うように、この分封には、前半部分の総括としての論功行賞と、さまざまな不満とそれが惹き起こす様々な事件、それらが原因となつて導かれる項羽の死という後半部分の主題とをともに内包している。前半の物語はすべてここに流れ込み、後半の物語はすべてここから流れ出すのである。「大旨は侯王の分封するを以て前後の關鍵と爲す」^(注4)(清の李景星)。

こうした点からも、項羽本紀が二つに大きく分かたれていることを確認することができる。(丁寧)に付け加えておけば、歴史的時間

が流れ始める前には、全体に対しての伏線となるべき断片的な数個の逸話が布置してあり、最後には論贊が記されているので、これらを加えれば全体としては、四つの部分に分かたれることになる。冒頭の部分の機能については、稿を改めて論ずる。

以上のことを確認して、後半部分の冒頭を見ると、奇妙な事実に氣付く。漢は諸侯に先んじて覇上に到達したことを記念して、歳首を十月に定めた。にもかかわらず、項羽本紀では「漢之元年四月」から後半部分が始めている。漢曆によるならば、漢元年十一月に起こった、項羽が新安において秦卒二十余万人を穴埋めにして虐殺した事件も、それに続く鴻門の会も漢元年の下に記されなければならぬ。事実高祖本紀ではそのように記述している。とすれば、項羽本紀では物語それ自体の必要から後半の開始がここまで引き延ばされた、と考えられる。

項羽（項梁）は会稽での叛乱に成功して、その結果「精兵八千人を得」た。そしてこの「八千人を以て江を渡りて西せんとす」るのが、項梁と項羽とが秦に対する叛旗を翻す第一歩であった。この「八千人」という数字の重要性は、見るように二度にわたって示されていること、更に烏江亭において項羽が「籍、江東の子弟八千人と江を渡りて西せしに、今、一人の還えるものなし。縦え江東の父兄、憐みて我を王たらしむとも、我、何の面目ありてかこれに見えん」と微笑みながら言って、死を覚悟する場面と対応させられていることに表れている。「八千人」から始まり「八千人」で終わる枠

項羽本紀を読む(杉山)

組みを持つこの項羽の物語は、同じく史記の伍子胥の物語と同様に、河を渡って新しい世界に足を踏み入れた主人公が最後は河を渡って戻ることのできなかつた悲劇の物語であるといつてよい。

いずれにせよ、物語の前半部分は、項羽が「八千人」の兵を基盤に「五諸侯を將いて」その兵力を膨張させ、遂には霸王となる過程を描いている。後半部分は、頂点にあった項羽が、高祖を初めとする諸侯の叛乱にあつて滅亡していく過程を描く。その冒頭を、内にさまざまな不満を含んだ分封の後、「諸侯は戲下を罷め、各おの國に就く」、諸侯たちは懷王の指揮下、実際は項羽の指揮下を離れて、それぞれ所領の國に赴いた、という記述で始めているのは意味あることと言つてよいであろう。糾合の後には、拡散が始まる。司馬貞は、「戲」を「戲水」、川の名とするが、このように考えてくるなら、「旌麾」と解する方がよりふさわしい。

二

段落を意識して用いて物語を展開させることは、史記全体を通じて言えば、必ずしも貫徹されているというわけではない。しかし項羽本紀に限つていうなら、それはきわめて意識的に用いられているといつてよい。

前半部分では、さまざまな人物が、河の支流が本流へと合流していくように、項羽の下に合流していく。「百川、海に歸するの形勢有り」と評したのは李景星であるが、ここでは陳嬰と范増との場合(注5)

について見てみよう。両者ともに入れ子細工のようにエピソードが挿入されている。

陳嬰の場合、主要な物語である項梁(項羽)の物語は、先ず「項梁、乃ち八千人を以て、江を渡りて西す。陳嬰の已に東陽を下せるを聞き、使を使わして與に連和し俱に西せんと欲す」とあつて、この記述は、挿入された陳嬰のエピソードを越えて、時間的な断絶なく直接「是に於いて衆、其の言に従い、兵を以て項梁に屬す」に連なっていく。更に「項梁、淮を渡る。黥布・蒲將軍も亦た兵を以て屬す。凡六七万人、下邳に軍す」と続いて、一段を終える。その直後に続く記述は、「是の時に當たり、秦嘉、已に景駒を立てて楚王と爲し、彭城の東に軍し、項梁を距がんと欲す」とある。「當是時」という語句は、項羽本紀の中では頻出し、おおむね直前の記述とは時をほぼ同じくしながらも異なった記述を新たに始めようとする場合に用いられている。この語句を使って、記述を転換させようとするのであつて、ここでも「秦嘉」という人物を新しく登場させて、新たな話題へと転換させている。当面の話柄に戻るなら、ここでは項梁の軍が「八千人」から出発して「六七万人」に増大したところで、この一段落が結束するのである。その中間に、陳嬰のエピソードが副次的な物語として、入れ子型をとって挿入されている、というのが、この段落の外形的な姿である。

陳嬰の物語は、「陳嬰の已に東陽を下せるを聞き」という記述を承けて、始められる。「已に」とあるように、陳嬰の物語は時間的

には既に先行しているため、いったん時間を遡行して説き起こし、「是に於いて衆、其の言に従い、兵を以て項梁に屬す」という、主要な物語と同じ記述、換言すれば同じ時間に到達して、物語を終える。この陳嬰の物語は、東陽で従う者二万人を得た陳嬰が、母親の忠告を入れ、手勢ともども項梁に帰属することを、その内容としていいる。陳嬰の母の忠告は、「暴かに大名を得るは、不祥なり。屬する所有るに如かず」という言葉に集約される。この「屬する所有るに如かず」という措辞と、段落末の「兵を以て項梁に屬す」という句との対応は、この副次的に挿入された段落を引き締めたものになっている。

范増の挿話の直前は次のような記述である。

「項梁、陳王の定めて死せるを聞き、諸別將を召し、薛に會して事を計る」。

項羽は、この時別將として襄城を攻略し、その後人々を穴埋めにして殺し、報告に戻っていた。「此の時、沛公も亦た沛より起りて焉に往く」。

「聞陳王定死」の句は、先行する「陳王、先んじて事を首め、戦い利あらずして、未だ所在を聞かず」という記述に対応しており、新たな事態の発生を示す。またこの時項梁の別將であつた朱雞石と餘樊君との二人が、秦の章邯の軍に敗れ、楚軍は危機に陥つたのである。項梁が別將を呼び寄せ、薛に会集させたのは、こうした状況を前提にしている。

そこに范増が登場するのであるが、この際にも時間の遡行がみられ、「往きて項梁に説きて曰く」という句において項梁を中心とする主要な物語に時間的には追いつき、「是に於いて項梁、其の言を然りとす」という句において、項梁を中心とする主要な物語と范増を中心とする副次的な物語とが内容的に重なることになる。そして范増の進言を受け入れた項梁は、「乃ち楚の懷王の孫心、民間に人の爲に牧羊するものを求め、立てて以て楚の懷王と爲す。民の望む所に従えるなり。陳嬰、楚の上柱國と爲り、五縣に封ぜられ、懷王と盱台に都す。項梁、自ら號して武信君と爲し、楚軍の態勢を立て直しに成功する。このようにして危機からその立て直しへの一段落が収束する。

秦楚之際月表によれば、項梁が懷王を即位させたのは秦二世二年六月であり、項梁が武信君と号したのは前年、秦二世元年九月のこととされている。月表を信じるなら、項羽本紀では項梁が武信君と名のつた時期が殊更に後に置かれたことになる。この結果、形式的には、この一段の完結性が際立たせられ、内容的には、読者に危機からの立て直しが強く印象づけられ、同時に後に説くように項梁の死への伏線ともなっている。

ちなみにこの直後に続く記述は、「居ること數月」の句によって導かれている。「居」とは記載すべき事件がなかったことを指し、物語のうえではこの間に時間的間隙があることを示す。換言すれば、その直前までの記述において一つの単位を構成する段落が終了し、

ここを初まりとして新たな段落が開始されることを示す。そしてこの段落では、項梁の突然の死が語られることになるのである。このように後段から見ても、前段での強固な完結性が確認される。

陳嬰、范増のエピソードともに、その部分が入れ子型になっているのは、項梁を中心に描かれる主要な物語に対して、陳嬰と范増とに視点を合わせて描写されるためである。陳嬰の場合は、時間的にも空間的にも異なった地点で描写されているが故に、一層その印象が強められる。

ところでこの副次的な物語は、主要な物語に対してどのような役割を果たしているのか。

陳嬰は部隊を引き連れて項梁に帰属する理由を次のように述べている。

「項氏は世世將の家にして、楚に名有り。今、大事を擧げんと欲するに、將、其の人に非ずんば、不可なり。我、名族に倚らば、秦を亡はさんこと必せり」。

項梁の家が代々將軍の家柄であり、楚の地で名声を得ている、ということが、その理由であるが、そのことの意味は范増のエピソードでは、さらに詳しく語られている。

「今、君、江東に起こり、楚の蠡午の將、皆争いて君に附きしは、君世世楚の將たりて、能く復た楚の後を立つと爲すを以てなり」。

「項氏世世將家」「君世世楚將」であることは、秦に滅亡させられた楚の国を復興すること、陳勝のように秦に叛旗を翻しながらも自ら

が王となるのではなく、楚の子孫を立てて楚王とするという人々の願望をよく実現できるための条件だと考えられていたことを示す。

漢書陳勝項籍伝では、会稽での叛乱の際、項梁のみが叛乱の中心となりうるとする会稽郡守の言葉を記録する。「夫子は楚將の世家なるを聞く、唯だ足下のみ」。梁玉繩の史記志疑は、いったんは上將軍となりながら項羽に殺戮される宋義について、こう記している。

「漢紀云えらく、宋義は故と楚の令尹たり、と。大事記曰く、懷の義を置きて元帥と爲せしは、特に其の兵を知るを喜ぶのみに非ず、亦楚の耆舊の大臣なるを以て、故に尊任して親ら之に倚る、と。史・漢、義の楚の令尹たるを載せず。荀氏の據る所は必ず楚漢春秋ならん」。^(注6)宋義が楚の令尹、楚の上卿で政を執る者の最高の官位であったことを、項羽本紀が記さないのは、項羽と宋義との争いにおいて、項羽が代々將軍の家柄であることを強調するには、宋義の楚における元の官位を記録することが躊躇われたからかもしれない。また陳勝と呉廣とが秦に叛乱を起こした際、彼らは自らを秦の公子扶蘇、楚の將軍項燕であると詐称している。陳涉世家によれば、これは「民の欲するところに従」おうとしたからだ、とされている。ここにみられるような事情は、同じく秦に滅亡させられた戦国の各国、戦国の六国すべてに妥当するであろう。叛秦の旗の下に集う勢力とその願望とは、こうしたものであった。

項梁の軍が「精兵八千人」から「六七萬人」に一気に膨れあがったことも、項梁が楚の懷王の孫心を懷王として即位させて、楚の軍

を再編成しえたことも、こうしたことを背景としている。

既に項羽本紀の冒頭には、次の句が置かれてある。

「其の季父は項梁、梁の父は即ち楚の將項燕、秦の將王翦に戮せられし者なり。項氏は世世楚の將たりて、項に封ぜらる。故に項氏を姓とす」。これは、項羽もしくは項梁が勢力を拡大し、秦を打倒し項羽が西楚の霸王となることを可能にしたことを説得的に語るための、用意周到に張られた伏線であったといえる。とするなら、陳嬰と范増との物語は、陳嬰や范増の伝記を物語るのではなく、項梁と項羽とを中心とした主要な物語に対して、この伏線を承けながら項梁、項羽の軍事力の拡大とその理由とを副次的に補足し説明しようとするためのものであった、といえる。ただ、ここでも急いで付け加えておくなら、陳嬰は、その後上柱国となったことが簡単に記されるだけで、その役割を終了させている。一方、范増はこの後項羽のブレンとして大きな役割を担って再度登場する。しかし、ここで「其の言を然りと」された後は、再び項羽に進言を受け入れられることが、物語の上では一度としてない。最後には、項羽に対する失望と怒りから背中を腫れものを発して死に至ることになる。辞職の願いだけが、項羽によって許可されるのみである。だとすれば、この「其の言を然りとす」という范増の物語の最後に置かれた語句は、いかにも皮肉な伏線である。

明の凌約言は、項羽本紀が項羽の軍事的な活躍を記す際に、同一の語句を反復して用いることに注目している。^(注7)「羽、會稽の守を殺

さば則ち一府慥伏し、敢えて起つ莫し。羽、宋義を殺さば、諸侯皆慥伏し、敢えて枝梧する莫し。羽の鉅鹿を救わんとするに、諸侯敢えて兵を縦つ莫し。已に秦軍を破れば、諸侯膝行して前み、敢えて仰視する莫し。勢い愈よ張り、人愈よ懼る。四つの莫敢の字を下して、羽の當時の勇猛、宛然として想見すべし」。因みに反復されるのはそれに止まらない。最初、項羽は会稽での叛乱において「精兵八千人を得」た。次いで東陽では「是に於いて衆、其の言に従い、兵を以て項梁に屬す」。更に「項梁、淮を渡る。黥布・蒲將軍も亦た兵を以て焉に屬す。凡六七萬人、下邳に軍す」。宋義を無鹽で斬殺した際には、「懷王、因りて項羽を上將軍たらしむ。當陽君・蒲將軍、皆項羽に屬す」。秦軍を鉅鹿に撃破した時には、「項羽、是れに由りて始めて諸侯の上將軍と爲り、諸侯、皆焉に屬す」。それぞれの段落において同一の語句を反復することで、各段落の完結性を高めると同時に、項羽の軍事的な能力を際立たせる効果をももたらしている。項羽の家柄とともに項羽のこうした軍事的な能力が、彼の軍を増大させ彼を成功に導いていくのではあるが、しかし家柄への信頼からする帰屬とこの勇猛さへの恐懼からする降伏とは微妙な齟齬をもたらすかもしれない。

項羽が宋義を斬殺して仮の上將軍となった時には、「是の時に當り、諸將皆慥伏し、敢えて枝梧する莫し」と記した上で、混乱する諸將が「皆曰く、首に楚を立てしは、將軍の家なり。今、將軍亂を誅せり、と。乃ち相與に共に羽を立てて假の上將軍と爲す」と記載

項羽本紀を読む(杉山)

している。項羽の勇猛さに懼れ怯えて敢えて反抗することもなく、項羽の叛亂を、逆に叛亂者を誅殺したものと認めてしまふ諸將が言う「首に楚を立てしは、將軍の家なり」という言葉には、これまでの項羽の家柄への信頼からする帰屬とは異なったニュアンスが読みとれる。項羽が秦の首都咸陽を殲滅すると、それは一層明確に言明される。「項王自ら王たらしむと欲し……謂いて曰く、天下、初めて難を發せし時、假りに諸侯の後を立てて、以て秦を伐てり。然れども身、堅を破り鋭を執りて事を首め、野に暴露すること三年、秦を滅ぼして天下を定めしは、皆將相諸君と籍の力となり」。かくして項羽は、陳餘が「項羽、天下の宰と爲りて平ならず。今、盡く故王を醜地に王たらしめ、而も其の群臣・諸將を善地に王たらしめて、其の故主を逐う」と非難するような行動にでて、究極懷王を殺害するにいたる。秦に滅亡させられた戦国の六国の復興と、その勢力の結集という自らの成功の基盤を、自分の手で突き崩すのである。項羽の滅亡はあらかじめ定められたといつてよい。

項羽の滅亡を描く後半部分の冒頭、前節で触れたように「諸侯は戲下を罷め、各おの國に就く」と記した直後に、懷王殺害の事件を続けて置くのは、これも緻密な配慮のもとでなされたものであったであろう。

三

物語は時間の流れに沿って展開するが故に、描写は概ね線条的に

なる。しかし、一つの事件の結末は、複数の事件がそれぞれ絡まってもたらず。この時、描写にはどのような工夫がなされるのか。項梁の唐突な死をめぐる描写を例に、この工夫を見てみることにしよう。

秦二世二年六月、項梁は范増の進言を受け入れ、楚の懐王の孫心を懐王として即位させた。同七月、陳嬰を柱国とする。項羽本紀の記述の上では、この時項梁自らは武信君と号している。こうして項梁は楚の態勢を立て直すのであるが、その後なにごともなく数カ月が経過する(「居ること數月」)。そして項梁の死に関わる重大なくつかの事件が分節化して語られる。

(一)「兵を引きて亢父を攻め、齊の田榮・司馬龍且の軍と東阿を救い、大いに秦軍を東阿に破る」。秦楚之際月表によれば、秦二世二年八月のことである。

(二)「田榮即ち兵を引きて歸り、其の王假を逐う」。(一)に登場する田榮を直接承けて記述がなされているので、この二つの分節はなめらかに接続している(「即ち」という語の働きも見逃されてはならない)が、後の記述をみれば明白なように、ここでは項梁を中心とした物語とは異なった物語、齊のお家騒動が語られることになる。

(三)「項梁、已に東阿の下なる軍を破り、遂に秦軍を追う」。ここでは、時間的にみるならもう一度(一)の時点に遡って記述がなされ、記述の対象からみるならば、(二)とは異なり、項梁を中心

とする主要な物語に立ち戻っている。ここに現れる「已」の語は、語の意味としては事態が既に起こったこと(完了)を示すが、文脈中での機能としては、段落の冒頭に置かれて、前段で既に起こった事態が次の段落で起こる事件の前提となることを示す。

項梁は田榮に対してしばしば楚を救援するための援軍を乞うが、田榮は受け入れたい条件を提示し拒絶して、項梁は齊の援軍を得ることができない。こうして、内容的には(二)とたがいに関連づけられながら、時間的にはほぼ平行する記述が進められる。

(四)「項梁、沛公及び項羽をして、別に城陽を攻めしめて、之を屠る」。ここでは更に沛公と項羽とに記述の対象が移され、分節化がおこなわれる。

秦楚之際月表によれば、沛公と項羽とが城陽を攻撃しこれを破り、西に進んで秦軍を濮陽の東で撃破したのは、秦二世二年七月。更に西進して地を攻略して、雍丘に至って秦軍を大破し、秦の將軍李由を斬ったのは、同八月のことである。時間的にみるなら、やや(一)より遡って描写され、ほぼ同時にまで至る。

この段は、「還りて外黄を攻むるも、外黄未だ下らず」という、結末が明示されない宙吊りのままで放置される。

(五)「項梁、東阿に起り、西北のかた定陶に至り、再び秦軍を破る。項羽等又た李由を斬り、益ます秦を輕んじ、驕れる色有り」。ここでは、いったん(一)に戻り、さらに定陶での再度の勝利を記し、(四)を含み込んで項梁の得意を示す。三度に互る秦軍

に対する勝利は、秦軍に対する侮りと自身への増長とを生む。

形式的には、各処でほぼ平行して進行してきた(三)(四)が、この冒頭に結集させられ、新たな事態の前提として機能させられる。同時に(二)において端緒が開かれ、(三)に至って明示される齊の援軍問題は、項梁の侮りと増長とを背後から浸食し、項梁の死を留意する。

(六)「宋義、乃ち項梁を諫めて曰く、戦い勝ちて、將驕り卒惰る者は、敗れん。今、卒少しく惰る。秦の兵日びに益す。臣、君の爲に之を畏る、と。項梁聽かず」。ここでは、(五)を承けながら、描写を宋義に据えて、項梁の秦軍に対する侮りと自らへの増長が、項梁の死を招くことを暗に示す。「項梁聽かず」という簡潔な句が、項梁の一層の驕りを示す。

(七)「乃ち宋義をして齊に使いせしむ。道すがら齊の使者高陵君に遇う」。ここでは更に(六)を直接承けて、宋義が明確に項梁の死を予言することになる。またこの分節が、項梁の死後、宋義が上將軍となる伏線ともなっていることは言うまでもない。

(八)「秦、果たして悉く兵を起こして章邯に益し、楚の軍を撃ちて、大いに之を定陶に破る。項梁、死す」。このようにして事態としては唐突に項梁の死をむかえるのであるが、その原因は以上のごとくきわめて丁寧に記載されているのである。

数度に互って記述の時間が東阿の戦いに戻るの、それが項梁の死の出発点であったことを示していよう。また(三)の齊の援軍が

得られなかったことは、記述の際にはさりげなく触れられているが、やがて大きく項梁の死に流れ込むことになる。更にこの事件をきっかけとする項羽の田榮への怨みは、分封の際の田榮に対する処遇となって反映し、それが田榮の不满を生み、項羽に対する叛乱に結びついて、結局は項羽の滅亡にも繋がっていくのである。「田榮者、數負項梁、又不肯將兵從楚擊秦、以故不封」。(四)は、項梁の驕りを生む原因の一つになったが、同時に項羽らの不在が項梁の死の原因の一端をも担うであろう。(四)で宙吊りにされていた彼らの行動は、項梁の死後の記述にすぐさま接続して、次に展開していく。

項羽本紀は、項梁の死という結末にむかって複数の時間が流れ込むさまを、いくつかの分節を使いながらこうして巧みに処理している。

四

垓下で漢軍に幾重にも包囲されながらも、項羽は騎馬で附き従うもの八百余人を引き連れて、夜をおして囲みを突破し逃亡する。平明、それに気付いて追撃する漢軍は、五千騎。

「項王、淮を渡る。騎の能く屬する者百餘人のみ。項王、陰陵に至り、迷いて道を失う。一田父に問う。田父、給きて曰く、左せよ、と。左す。乃ち大澤中に陥る。故を以て漢は追いて之に及べり」。短い文章を重ね、たみこんでいくような異例な表現は、文章にスピード感をもたらすものとなっている。范増の進言を受け入れるこ

とのなかつた項羽が、ここでは何の疑うこともなく田父の言葉を受け入れる。范増の進言を受け入れることがあれば、高祖を打倒することも可能であつたにもかかわらず、項羽はそれを受け入れなかつた。田父が「給きて」言う指示を何事もなく受け入れる項羽の姿は、まことに皮肉な表現である。その結果、項羽は大きな沢地に踏み込んで身動きできず、漢軍に追いつかれてしまう。「迷失道。問一田父。田父給曰、左。左。」とは、あたかも自らの信じた道を踏み外し、逆に定められた運命にあらがうことなく死へと追いつめられていく項羽を象徴するような表現である。

ところで、ここでは、項羽のあらがうことのできない運命を表現するのに、数字が多用されるのが特徴的である。

項羽の軍は、八百余から百余へ、さらにはいっすきに二十八騎へと激減する。一方漢軍は五千騎で追い、項羽に追いつくことのできた者数千人となっている。

項羽はここにいたって、もはや脱出できないことを悟り、この窮迫が天が自らを滅ぼそうとしているのであつて、自分の人間的な能力の不足によるものでないことを明らかにしようとする。人間的な能力と天の操る運命とのせめぎあい、この項羽本紀の枠組みの一つであるが、項羽は運命の前で自分の人間的な能力を証立てようとするのである。こうした枠組みについては、吉川幸次郎「項羽の垓下歌について」が詳しい。^(註8)

この間の短い記述には数字の氾濫といつてよいほどの数字が用い

られるが、ここでは項羽に関わつて用いられている数字のみを取り出してみよう。

「其の騎を分かちて、以て四隊と爲し、四もに嚮わしむ」。

「其の騎と會して、三處と爲る」。

「復た其の騎を聚むるに、其の兩騎を亡うのみ」。

数字だけを見ていくならば、八百余から百余へ、さらには二十八に、そして四、三、二(兩)と移っていく、最後は「今、一人の還えるものなし」に行き着くのである。「我、何の面目ありてか之に見えん」。

項梁の死の場合は、死そのものには具体的に触れることなく、その原因について詳細にまた説得的に記述された。一方、項羽の場合には、本紀全体の枠組みそのものなかで、とりわけその後半部分で詳細に滅亡への必然性が示されてある。その記述上の特色については稿を改めることとして、この間の記述において担われるのは、項羽の死に向かつていく加速的な速やかさであったことは、指摘できる。

このスピード感あふれた文章の流れと、その中に布置された数字の変化は、項羽のあらがうことのできない運命と死へとむかつていく加速的なスピードとを反映している、といつてよい。

五

本稿は、項羽本紀を主として表現の形式の面から考察した。しか

し論ぜられるべき課題は、まだ多く残されてたままである。項羽本紀のなかに八度にわたってみられる「是の時に當り」という語句の分節化における機能や、類出する「已に」「是に於いて」などの語句の役割は、物語の構造や表現形式を考えようとする際には、避けることができない。また章邯との戦いの際の記述の冒頭、「章邯軍棘原、項羽軍漳南」という記述の方式は、その後「項羽兵四十萬、在新豐鴻門。沛公兵十萬、在霸上」というように何度も繰り返し用いられ、分節の冒頭の一つの方式を形成している。また何よりも、表現形式にとって重要な問題を提起してくれるのは、より強く虚構を用いて表現された部分なのであり、この点で鴻門の会や垓下の戦いと呼ばれる箇処の分析が必要とされるであろう。こうした点を次稿の課題とする。

(注)

- 1 バートン・ワトソン「司馬遷」(今鷹真訳)第四章。筑摩書房。1965。
- 2 「史記評林」卷七に引く。
- 3 1に同じ。第四章原注。
- 4 「四史評議」史記評議。
- 5 4に同じ。
- 6 「史記志疑」卷六。
- 7 「史記評林」卷七に引く。
- 8 「中國文學報」第一冊。京都大学文学部中国語学中国文学研究室。1954。